# 三代集の春歌巻頭歌群について：『拾遺和歌集』の位相


| メタデータ | 言語: Japanese<br>出版者:<br>公開日: 2021-04-05<br>キーワード (Ja):<br>キーワード (En):<br>作成者: 倉田, 実<br>メールアドレス:<br>所属: |
| --- | --- |
| URL | https://otsuma.repo.nii.ac.jp/records/6981 |

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

大妻女子大学紀要―文系―　第五十三号、令和三（二〇二一）年三月

# 三代集の春歌巻頭歌群について

## ―『拾遺和歌集』の位相―

倉田　実

【キーワード】　古今和歌集、後撰和歌集、暦月、節月、立春

### はじめに

勅撰和歌集は、最初の『古今集』を範として、前半に四季歌、後半に恋歌を配置する形態をとっていた。四季歌の場合は、時節の推移に応じた代表的な景物ごとに歌を歌群[1]として配置する仕方を基本的に採用していた。類纂的な方法を取ったのである。

そして、春歌は必然的に集の冒頭に据えられることとなったので、冒頭歌群にどのような歌を配置するかは、撰者たちにとって重要な問題であった。春歌冒頭歌群は、春歌だけにかかわらず、四季歌の構成や集全体の構想、さらに、自然観・季節感の表明や形成にもかかわる面が多分にあったからである。

そこで、この小稿では三代集を採り上げて、春歌巻頭歌群の特徴や位相を考えていくことにしたい。四季は推移するものなので、時間が構成の軸となり、冒頭歌群は、年頭を意識した新年詠歌群となっている。そこで、以下は、冒頭歌群を新年詠歌群としていくことにする。

なお、新年といっても、当時は二通りの把握の仕方があった。後にも言及するが、当時は二十四節季によった節月と、暦によった暦月を併用する二元的季節観が浸透していたのである[2]。立春といった場合は節月、正月一日といった場合は暦月になり、この両者の違いは無視できないものになっている。そこで、両者を含めて新年詠とするわけである。

新年詠の問題については、すでに周到な考察[3]がなされているが、まだ若干の言及する余地はありそうである。本稿の意図は、『拾遺集』独自の発想を定位することにあり、そのために三代集としての検討をするという次第である。

和歌の引用は『新編国歌大観』により、表記は分かり易いように適宜漢字を当てた。よみ人知らずの場合は、その旨の表記は割愛した。

### 一　『古今集』新年詠歌群

まずは、『古今集』の春歌巻頭歌群、すなわち新年詠歌群の確認から始めたい。歌群の進行については、次のように考えている。

新年詠歌群　一～六
春雪歌群　七～九
初春歌群　一〇～一二
鶯歌群　一三～一六
野焼　一七
若菜歌群　一八～二二
（以下略）

『古今集』の新年詠は、節月の立春を主題にした詠歌群として巻頭に据えられている。

ふる年に春立ちける日よめる
年の内に春は来にけり一年を去年とや言はむ今年とや言はむ
（古今・春上・一・在原元方）

春立ちける日よめる
袖ひちて掬びし水の凍れるを春立つ今日の風や解くらむ
（同・二・紀貫之）

題知らず
春霞立てるやいづこみ吉野の吉野の山に雪は降りつつ（同・三）

二条の后の春の初めの御歌
雪の内に春は来にけり鶯の凍れる涙今や解くらむ（同・四）

題知らず
梅が枝に来ゐる鶯春かけて鳴けどもいまだ雪は降りつつ（同・五）

雪の木に降りかかれるをよめる
春立てば花とや見らむ白雪のかかれる枝に鶯ぞなく
（同・六・素性法師）

題知らず
心ざし深く染めてし折りければ消えあへぬ雪の花と見ゆらむ
（同・七）

歌群の別が分かるように七番歌も引用した。七番歌には年頭を示す歌語は不在であり、ここから春雪歌群になると判断される。

巻頭歌は、「ふる年に春立ちける日よめる」との詞書が付されて、周知のように、暦月の正月の前に、節月の立春が来るという齟齬を詠んでいた。新年立春とならない、二元的季節観のズレを理知的・機知的に把握したのである。そして、立春という節月を優先した旧年立春を詠んだこの歌を、『古今集』は巻頭に置いたのであった。節月は天が司るもの、暦月は帝王が司るもので、『古今集』は、天を優位に置いたとする理解もある。(4)

『古今集』は、この巻頭歌を受け、節月から発想する立春の歌で新年詠歌群を形成させている。「春立つ」を基準として、「春は来にけり」「春霞立てる」が使用されている。「春は来にけり」の「春」は立春の意である。「春霞立てる」の場合は、「霞立つ」意に「春立つ」が掛けられている。五番歌「春かけて」も『古今集』の配列では、「立春にかけて」の意となろう。

さらに、二・四番歌の「凍れる…解く」も節月からの把握であった。七十二候の応用である。

・孟春之月…東風解凍、蟄蟲始振、魚上冰…。（『礼記』「月令」）
・立春之日、東風解凍。後五日蟄蟲始振。後五日魚上冰…。
（『太平御覧』春上）

『太平御覧』には「立春之日、東風解凍」とあり、立春の日には、厚い氷が解けるとされていた。これを受けて、二番歌は「氷」を「風や解くらむ」としている。この風は「東風」になる。また四番歌は、水の氷ではなく、鶯の涙の氷として、「今や解くらむ」としている。「今」は、立春になった今になる。二・四番歌は、「立春之日、東風解凍」を字義通りに詠んだことになる。そうすると『古今集』新年詠歌群は、節月意識で一貫していることになる。そして、旧年に対する意

識も認められるのである。

先の四番歌は一番歌と呼応するように置かれている。

年の内に春は来にけり一年を去年とや言はむ今年とや言はむ（一）
雪の内に春は来にけり鶯の凍れる涙今や解くらむ　（四）

四番歌の「雪」は、旧年の残雪である。一番歌の歌句と呼応することで旧年立春とも読めるようになっている。旧年の雪が残っているうちに立春になったので、ということであり、旧年が意識されている。五・六番歌の鶯も旧年から立春にかけて鳴き、白雪を花と見ている。『古今集』では、新年詠に旧年立春を暗示させる歌群を配置したといえそうである。

この配置は、季節は、重層的にあるということを表現しているのであろう。冬の内に春の気配があり、春になっても冬が残っているということである。それは夏と秋の間にも言えるのであった。

水無月の晦の日によめる
夏と秋と行きかふ空の通路は片へ涼しき風や吹くらむ
（『古今集』夏・一六八・凡河内躬恒）

夏が行くと秋が来る。そうすると夏と秋とがすれ違う道では、熱風の通る片側には涼風が吹いているだろうとしている。季節は重層するのであり、秋と冬、冬と春、春と夏にもそれがあるということになる。春歌に「旧年立春」「旧年残雪」が詠まれるのは、新年だけの問題ではなく、四季の循環に対する把握の表明であったことになる。そして、その重層性は、景物（歌語）によった歌群の連結にも表れている。

新年詠の歌語と歌群について確認しておこう。三番歌から、四首続けて雪が詠まれているわけだが、この部分の扱いに、注意したい。雪は、新年詠歌群に続く七～九番歌でも続けて詠まれているので、三～九番歌を「春雪歌群」とすることも可能かもしれない。また、鶯が四～六番歌に詠まれているので、ここを「鶯歌群」とすることも可能かもしれない。しかし、鶯は、この後、一〇・一一番歌、一三～一六番歌にも詠まれている。したがって、四～六番歌を鶯歌群とする必要はなく、新年詠歌群か春雪歌群とすべきであろう。ここは、六番歌に「春立てば」とあるので、ここまでを立春の新年詠歌群と把握した次第である。歌語も歌群間で重層しているのである。

三番歌に戻りたい。この歌で使用された「春霞立つ」は、『万葉集』以来の用法であった。

昨日こそ年は果てしか春霞春日の山にはや立ちにけり
（『万葉集』一〇・一八四三）

『万葉集』で立春と結びついた霞の用法は、この一首だけである。そして、『拾遺集』三番歌に、二句を「年は暮れしか」の形で山辺赤人詠として収載されている。昨日で旧年は果ててしまったのに、春霞は春の日の名を持つ春日山に早くも立っていたことだと詠まれている。奈良盆地での新年の景色である。ここの霞を、新年（立春）になったから立ったと把握したのか、新年にたまたま立っていたとしたのか、不分明である。立春と結びつく霞の用法がこの一首のみとすると、後者の可能性も高い。しかし、『拾遺集』に置かれると、明確に前者となる（後述）。

一方、『古今集』の三番歌では、「春霞立てるいづこ」とされ、霞は吉野山に目睹されていない。立春と霞とのかかわりを、『古今集』では意識されていないことになろう。『古今集』の新年詠歌群は、春霞が詠まれたとしても新年到来の指標となることはなく、立春という節月意識でまとめられているのである。

新年詠歌群六首には、それにふさわしい、次のような景物が併せて詠みこまれていた。

解氷・東風・春霞・春雪・鶯・梅枝

これらが新年詠の景物であった。このうち、氷は立春で解けてしまうもので、春になれば不在となる。霞は、三番歌では目睹されておらず不在であった。鶯は飛来しているが、梅花は不在で枝に積もった雪が花に見立てられている。眼前の景物は、雪だけになる。新年詠歌群は、節月意識を基にして、春雪を主要な歌材・歌語にしていたことになる。七番歌は残雪だが、六番歌までは新雪であり、基本は春雪なのである。

歌の配列でも、立春は春雪が主題であることを示そうとしているようである。単純化すると、次のように示せる。

「や解くらむ（二）・雪は降りつつ（三）
｜や解くらむ（四）・雪は降りつつ（五）

一首隔てて結句揃いになっている歌句が二組になっている。右のようにして見ると、漢詩の対句のように見られなくもない。漢詩に対応する和歌を宣揚する『古今集』撰者たちの配列の妙として理解できるように思われる。

以上、『古今集』の新年詠歌群は、立春という節月意識のもとに配列され、景物は解氷・東風・春霞・春雪・鶯・梅であった。これらの景物の中で、霞は三番歌だけに使用されており、それよりも春雪が主要であったことを確認した。続いて、『後撰集』に転じていきたい。

## 二　『後撰集』新年詠歌群

『後撰集』の四季歌には、主題の分散配置説があり、[5] 同じ歌群が複数存在している。しかし、新年詠は春上巻頭に三首だけ認めることができ、これを新年詠歌群としておきたい。四首目は「朔日頃」と詞書にあり、五首目は子の日の歌になっている。四首目までを引用する。

正月一日、二条の后の宮にて白き大袿を賜りて
ふる雪のみのしろ衣うちきつつ春来にけりと驚かれぬる
（『後撰集』春上・一・藤原敏行）

春立つ日よめる
春立つと聞きつるからに春日山消えあへぬ雪の花と見ゆらむ
（同・二・凡河内躬恒）

今日よりは荻の焼け原かき分けて若菜摘みにと誰を誘はん
（同・三・兼盛王）

ある人のもとに新参りの女の侍りけるが、月日久しく経て、睦月の朔日頃に前許されたりけるに、雨の降るを見て
白雲のうへしる今日ぞ春雨のふるにかひある身とは知りぬる
（同・四）

『後撰集』になると、『古今集』とは随分と違った新年詠歌群になっている。まず、詞書のありようから確認していきたい。一・四番歌には長い詞書が付されている。その内容は人事であり、四季の景物にかかわっていない。すでに色々と言われているように、『後撰集』の歌語り的な性格が巻頭から露出していることになる。この二首には、『大和物語』に入れられてもいいようなゴシップ性があろう。『後撰集』は詞書が重要になっており、『古今集』とは方向性が違うのである。

一番歌詞書は「正月一日」とあり、『後撰集』では、節月ではなく暦月が冒頭で意識されている。『古今集』と違って、節月よりも暦月を優位に置いたことになる。この暦日規定が詞書にあることで、一番歌は新年詠となっている。元旦でなくても、二日や三日でも構わない歌であることは確かである。歌の内容を確認しておきたい。

歌は、掛詞が駆使されて二重の文脈が形成されている。「ふる」に「降る」と老いた意の「古る」、「みのしろ衣」は「蓑代衣」に禄とし

て賜った「白衣」、「うちきつつ」に禄を肩にかけて拝受する「うち着つつ」とこれも賜った「袿」が、それぞれ掛けられている。また、「春来にけり」に、新春の到来と、老いた身にもめぐみの春が来た意を添えて、禄を賜った謝恩としている。降る雪のように白い衣を着て、春の到来に気づいた意に、禄の白い袿を賜った老いた身の光栄を重ねたのである。

新年詠に人事が絡んだ歌を配置したのであり、これには先例があった。『古今集』八番歌である。

二条の后の東宮の御息所と聞こえける時、正月三日御前に召して仰せごとある間に、日は照りながら雪の頭に降りかかりけるをよませ給ひける

春の日の光にあたる我なれど頭の雪となるぞ侘しき

（『古今集』春上・八・文屋康秀）

『後撰集』一番歌では正月一日の二条后、『古今集』八番歌では正月三日の二条后である。両集とも二条后高子への思い入れが強いようであるが、これ以上は触れない。『古今集』八番歌は、正月三日のことなので新年詠歌群には入れられないが、『後撰集』では一日のことであったのでここに位置することができている。日にちの違いはあるが、両首とも御前に召された光栄と、白髪の身の嘆老を重ねており、歌の構造は似ている。

『後撰集』二番歌は、詞書に「春立つ日よめる」とあり、節月の立春詠で、詞書は三番歌にもかかっている。三番歌などは、二日以降の日の歌にしても構わない内容になっている。

二番歌の作者は躬恒であり、見立ての技法からして、『古今集』に入れても何の問題のない歌である。三句「春日山」は、「吉野山」に作る本文もある。春日山の雪は、それほど類型化していないが、躬恒には次のような歌もあった。

いづれをか花とは分かむ故里の春日の里のまだ消えぬ雪

（『躬恒集』・三八九）

春日はどういう訳か山より里の方に雪が詠まれている。しかし、同じ春日の雪なので、二番歌の山は、春日山でも吉野山でも、どちらともとれよう。吉野山が穏当とは必ずしも言えまい。

また、この歌は先に便宜的に引用した『古今集』七番歌と相似している。

古・心ざし深く染めてし折りければ消えあへぬ雪の花と見ゆらむ
後・春立つと聞きつるからに春日山消えあへぬ雪の花と見ゆらむ

下句が共通しているが、その所以は分からない。

三番歌も同じ詞書になるが、立春よりも若菜摘みの歌になっている。若菜摘みは、子の日の行事であり、年頭にするものではない。二句の「荻の焼け原」は野焼のことで、『古今集』も『拾遺集』も若菜詠の前に野焼詠が位置している。新年詠ではないのに、ここに置かれてしまったことになろう。何らかの手違いを想定すべきであろう。そもそも、この歌は立春の歌ではなかったようなのである。『大和物語』には、次のような地の文のあとに置かれていた。

睦月朔日頃、大納言殿に、兼盛参りたりけるに、物などのたまはせて、すずろに「歌詠め」とのたまひければ、

今日よりは荻の焼け原かき分けて若菜摘みにと誰を誘はん

（『大和物語』八六段）

「朔日頃」のことなので歌に若菜が詠まれてもおかしくはなかった。しかし、『後撰集』は「春立つ日よめる」との詞書がかかわるので、立春に若菜はやや尚早でそぐわなくなる。さらに、「今日よりは」が

一層落ち着かなくなる。『大和物語』の設定でも、この語句のかかる言葉が不在である。それでも、「こちらに参上した今日からは、荻の焼け原を掻き分けて、若菜を摘みに行くのに、誰を誘って行こうか、殿と行きたいと思うことだ」とする歌になろう。「今日よりは」は、『大和物語』で、立春の今日の意ではあるまい。『後撰集』では、立春の今日から思うことだということになり、時間的に間延びすることになろう。新年詠歌群に置くには、問題があると言えよう。この歌も人事の色彩が強くなっている。

なお、四番歌は、詞書に「睦月の朔日頃」があるので新年詠とは認められない歌である。これも一番歌と同じく、年を経て主人の御前の伺候が許された光栄を詠んでおり、やっと我が身にも春が来たという内容になっている。

『後撰集』の主題の分散配置は、新年詠にも認められ、次のような歌も収載されている。

女の宮仕にまかり出でて侍りけるに、めづらしきほどは、これかれ物言ひなどし侍りけるを、ほどもなく一人に逢ひ侍りにければ、睦月の一日ばかりに言ひつかはしける

いつのまに霞立つらん春日野の雪だに解けぬ冬と見しまに　（同・一五）

配置を四番歌と交換しても構わない歌である。「霞立つ」は立春とはならず、雪でさえ解けない冬と思っていたのに、いつの間にか新春になったとしている。ここに他の男と打ち解けるなんてという意が込められて新春の景物が人事の比喩となっている。春歌に入れられているが恋歌であり、人事性がまさっているのである。

以上、三首が新年詠歌群であった。景物は雪だけということになろう。三番歌の「若菜」は新年詠にそぐわない。巻頭歌には暦日意識、二、三番歌には節月意識が認められるものの、季節詠よりも人事詠に傾斜する度合いが大きかった。さらに、一番歌は、老いの身に春の到来という、嘆老・沈淪・訴嘆を前提にした詠歌になっている。『古今集』にも八番歌が同質の歌になっていたが、その度合いは、『後撰集』でより深まっていると言えよう。これは『古今集』の頃よりも身分制度が固定化した受領階級と言える撰者の梨壺の五人の感懐が投影している面も指摘できるかもしれない。『後撰集』には嘆老・沈淪・訴嘆が歌群をなしている。例えば、引用は省略するが、春歌内にも、一九～二一番歌、一三五・一三六の贈答歌などである。

総じて、『古今集』とは背馳した『後撰集』のありようが窺えるのである。

## 三　『拾遺集』新年詠歌群

まず、歌群の配置を確認しておきたい。

新年詠歌群　一～八
春雪歌群　七～一四
梅歌群　一二～一七
野焼　一八
若菜歌群　一九～二〇
（以下略）

歌群の認定は『古今集』よりもしにくい。試案として、『拾遺集』では二つの歌群にまたがる歌の存在を認定してみたい。歌番号を重複させたのはそのためである。右記では七・八番歌が新年詠歌群と春雪歌群に、一二・一三番歌が春雪歌群と梅歌群に、それぞれまたがって、鎖状に連接されていると見てみた。

新年詠歌群の範囲としては、五・六番歌に鶯、七番歌からは春雪（残雪ではない）が詠まれているが、七・八番歌に「春立ちて」とあ

るので、ここまでを新年詠歌群と見るべきと判断した。いかがであろうか。そうすると、春歌の歌数が三代集で『拾遺集』が一番少ないのにもかかわらず、新年詠歌群の歌数は一番多いということになる。『拾遺集』は『古今集』に近いとされるが、やはり独自な新年詠歌群になっている。

平定文が家歌合によみ侍りける

春立つといふばかりにやみ吉野の山も霞て今朝は見ゆらん

（『拾遺集』春・一・壬生忠岑）

承平四年中宮の賀し侍りける時の屏風の歌

春霞立てるを見れば新玉の年は山より越ゆるなりけり

（同・二・紀文幹）

霞をよみ侍りける

昨日こそ年は暮れしか春霞春日の山にはや立ちにけり

（同・三・山辺赤人）

冷泉院東宮におはしましける時、歌奉れと仰せられければ

吉野山峯の白雪いつ消えて今朝は霞の立ち代わるらん

（同・四・源重之）

延喜御時月次御屏風に

新玉の年立返る朝より待たるる物は鶯の声　（同・五・素性法師）

天暦御時歌合に

氷だにとまらぬ春の谷風にまだうち解けぬ鶯の声（同・六・源順）

題しらず

春立ちて朝の原の雪見ればまだふる年の心地こそすれ

（同・七・平祐挙）

貞文が家歌合に

春立ちてなほ降る雪は梅の花咲くほどもなく散るかとぞ見る

（同・八・凡河内躬恒）

題しらず

我が宿の梅にならひてみ吉野の山の雪をも花とこそ見れ

（同・九）

まず詞書から見ておきたい。時節を示す詞書の言葉は二番歌の「霞」だけで、詠歌された場を示すものがほとんどである。歌合・屏風歌・歌召しなどが詠歌の場として記されており、晴の歌の集成という面を提示している。『古今集』は、先に引用したように「…日よめる」「…をよめる」とする詠歌の契機を簡潔に示す詞書が主であった。『後撰集』は、具体的に詠歌事情を記そうとしていた。詞書の位相が三代集で違っているのが確認できる。

『拾遺集』の場合は、このような詞書になっているので、詠歌された時節は、歌からしか把握できない仕組みになっている。歌語の比重が増しているのである。

新年詠歌群の問題としては、年頭という時節を表わす歌語が使用された歌を配列しているということになる。そうすると、歌順で、一「春立つ」、二「新玉の年」、三「昨日…暮れ」、四「今朝」、五「年立返る」、六「氷…解け」、七・八「春立つ」となる。しかし、関連して、冒頭四首には「霞立つ」と、その類例が使用されており、これも新春歌の指標となる歌語と言えそうである。一「春立つ…霞みて」、二「春霞立てる」、三「春霞…立ち」、四「霞の立ち」である。「霞立つ」が重用されているのである。一番歌が「春立つ」で節月意識になり、以下も「霞立ち」を併用する歌を並べて、節月で一貫したと言える。

まず、「春立つ」から再度確認しておきたい。これは明確な一年の初め、年頭を表わす節月による歌語であった。しかし、旧年立春と新年立春とが、当時はほぼ同数近くあり、『古今集』巻頭歌が前者であったことからすると、『拾遺集』一番歌が、どちらになるのかは考えておくべきであろう。詞書に詠歌事情が明示されないので、どちらともとれるのである。旧年立春を詠むことは『古今集』だけのことではなく、次のような事例もあった。

粟田の大臣まだ弁にておはせし時に、旧年に節分の初めにて侍りし日、梅の花をよませたりしに

枝分けて匂ひやすらん梅の花年の内なる春のしるしは

（『兼澄集』四六）

旧年中に立春があり、その前日の節分の日に詠まれている。歌は、梅の枝は、旧年分と新年分に分けて咲き匂うのでしょうか、旧年立春のしるしとして、と詠まれている。兼澄は『拾遺集』の歌人である。

旧年立春は依然として、和歌の素材なのであった。『拾遺集』一番歌の場合は、「平定文が家歌合（左兵衛佐定文朝臣歌合）」によれば、首春・仲春・暮春と分節された首春題のものなので、そもそもは新年立春であった。『拾遺集』撰者は、そのつもりで巻頭に配置したことになろうが、含みとして旧年立春もあるということだと思われる。

二番歌以降の「新玉の年」「昨日…暮れ」「今朝」は、年頭を表わす言葉であった。そして、「春霞立てる」「春霞…立ち」「霞の立ち」が関連して使用されたが、この歌では、目睹されていなかった。『後撰集』では霞は不在、そして、『拾遺集』での重用。『拾遺集』は、すでに指摘されているように、「霞立つ」を、立春を示す歌語として改めて明確にしたのだと思われる。だから、「平定文が家歌合」での、『古今集』歌人壬生忠見の歌を巻頭に配したのだと思われる。この歌が、平安和歌で、『古今集』三番歌と共にもっとも最初に詠まれた立春詠としての「霞立つ」の使用であった。

『拾遺集』二番歌は、春霞が山に立つのを視認したことで、新年の到来が、山からであったと実感したとしている。承平四年（九三四）での屏風歌であり、歌合でも屏風歌でも、立春に霞が立つがあったことを強調しているのかもしれない。

さらに、『万葉集』歌人である山辺赤人詠とした歌を三番歌としたのは、「霞立つ」で立春を詠んだ旧例として顕彰しようとしたのかもしれない。赤人は『古今集』仮名序で人麿と併称されていた。これを受けて『拾遺集』では、人麿詠のあとの八一九・八三七番歌を赤人詠としている。しかし、三番歌は赤人詠のみである。この歌は、前に引用した、『万葉集』では作者未詳となる一八四三番歌の異伝歌であったが、いにしへの歌人の歌として配置したことになろう。

この三番歌は、大晦日の昨日で年は暮れたのに、春霞が春日山に早くも立っているのに気づいたとするもの。立春ですぐに霞が立つのである。

四番歌も同じ発想のものとなるが、趣向はやや違っている。吉野山の雪は、いったいいつ消えて、立春の今朝は霞に代わっているのだろうとしている。これは、雪が消えたのではなく、立春になったので、雪を霞と見てしまったということであろう。とにかく立春に霞が立つ歌が、意図的に四首置かれたことになる。

『拾遺集』が新年詠に「霞立つ」を多用したことで、この歌語の用法がより明確になり、『後拾遺集』に引き継がれたと思われる。

陸奥国にはべりける時、春立つ日よみ侍ける

出でて見よ今は霞も立ちぬらん春はこれより過ぐとこそ聞け

（『後拾遺集』春上・二・光朝法師母）

立春日よみはべりける

逢坂の関をや春も越えつらん音羽の山の今日はかすめる

（同・四・橘俊綱）

寛和二年花山院歌合によみ侍ける

春の来る道のしるべはみ吉野の山にたなびく霞なりけり

（同・五・大中臣能宣）

『後拾遺集』二番歌は、「霞も立ち」で立春を言っている。作者は、清少納言の元夫、橘則光の妻であり、『拾遺集』時代の人であった。四番歌には「霞立つ」はないものの、「かすめる」で立春を指示して

いる。

五番歌も、擬人化された春の道案内は霞であったとするもので、そもそもは立春を言うことに主眼はなかったはずである。しかし、『後拾遺集』に置かれたことで、立春詠としての意味合いが前面に出できたことになろう。『後拾遺集』は『拾遺集』を受けることで、「霞」を新年詠の歌語にしていると思われる。

勅撰集としては、『拾遺集』で新年詠に霞が使用されるようになったわけだが、なぜ霞が多用されたのかは、歌自体が示しているようである。もう少し霞にこだわっておきたい。

『拾遺集』で「霞立つ」場所は、四首とも「山」であった。一「吉野の山」、二「山」、三「春日の山」、四「吉野山」である。「山」が詠まれる理由は、二番歌で明白であろう。「春霞立てるを見れば新玉の年は山より越ゆるなりけり」とされるように、新年は山を越えてくるとする民俗的な発想があって、霞は新年とともに山にまず立ったとされたのである。

これは、新年に、山から豊饒・延命をもたらす歳神や祖先神でもある山の神が来臨するという信仰であり、その依代の一つは、門松でもあった。『年中行事絵巻』巻一「朝覲行幸」に、民家の門口に立てられた門松が描かれている。門松は、山や市（市の神は山の神でもある）で求められていた。また、山の神は農業神でもあり、山々の様子で、農事の日取りが決められていた。だから、春は霞の立つ山から来ると和歌でも発想されたのであろう。

こうした和歌としては、先の『拾遺集』二番歌の他に、これも引用した『後拾遺集』の四・五番歌が挙げられよう。さらに次のような歌も挙げられよう。

年籠りに山寺にはべりけるに、今日はいかがと人のとひてはべりければ
人知れず入りぬと思ひしかひもなく年も山路を越ゆるなりけり
（『後拾遺集』春上・六・大中臣能宣）

倉橋の山のかひより春霞年を積みてや立ち渡るらん
（『朝忠集』・四〇）

こうして見ると、『後拾遺集』は、『拾遺集』を受けて、霞立つ山から春が来るとする歌を意図的に集めたと思われる。霞詠がさらに発展したことになろう。

『拾遺集』五番歌以降にもどる。五・六番歌は新年の鶯で鳴声はまだ聞こえていない。六番歌は「立春之日、東風解凍」で、『古今集』四番歌を想起させる歌になっている。節月意識となる。ここは、鶯歌群とはせず、新大系の「主題としては立春に含まれるか。新春を感じさせる鶯の声を待つ」とするのがいいであろう。

続く七・八番歌は「春立ちて」のいわば初句揃えになっている。こうした配置の仕方は、三代集で『拾遺集』が最多で、その用例の所在が整理されている。[6] 歌語を密接に連結させる工夫となろう。初句の他に、「まだふる年」と「なほふる雪」の対応も認められる。七番歌の「春立ちてあしたの…」は立春の朝の意を掛けており、新年詠であることを提示している。八番歌は、立春なので雪が梅花に見立てられる常套的な歌になっている。

新年詠歌群は八首であった。歌語としては、「霞立つ」「鶯」「春雪」があるという構造になろう。こうした構造が、『拾遺集』に目立つのだが、この点は多様に考えられるであろう。[7]

## おわりに

三代集の新年詠歌群を検討してきた。百年ほどの間隔のある三代集なので、それなりの変容が認められるのであり、『拾遺集』は『古今集』に近いとされるものの、固有な発想、歌語の発掘、歌語の連鎖などに独自性が認められるように思われる。

## 注

（1）松田武夫『古今集の構造に関する研究』（風間書房、一九六五・九）が、範例となる歌群の配置を示している。

（2）田中新一『平安文学に見る二元的四季観』（風間書房、一九九〇）

（3）川村晃生「春の到来をめぐって」（『摂関期和歌史の研究』三弥井書店、一九九一・四）

（4）新井栄蔵「古今集四季の部の構造についての一考察」（『國語國文』一九七二年八月）

（5）杉谷寿郎『後撰和歌集研究』（笠間書院、一九九一・三）

（6）山崎正伸「拾遺和歌集の構造についての試論――初句同一・歌末同一・重複歌・重出歌をめぐって――」（二松学舎大『人文論叢』50、一九九三・三）

（7）『拾遺集』の恋歌の構造については、拙稿「『拾遺集』恋歌の配置構成」（『大妻国文』52、二〇二一・三）で少々扱った。